

先人の知恵を活かす

—自然を読み、稲と語り、そして心を耕す—

と き／6月30日(金) 午前9:30～午後4:30

ところ／盛岡市民文化ホール(マリオス大ホール)
盛岡市盛岡駅西通2-9-1 Tel.019-621-5100



主催：東北農業試験場・農林水産技術情報協会・農山漁村文化協会

後援：東北農政局・青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県

開催趣旨

冷害に繰り返し苦しめられてきた東北の米作り。今日の東北の米作りをみると、稲作農家、技術開発に携わった研究者ならびに行政関係者の絶え間ない努力の結晶とも写る。しかし、現状の農業とその生産環境を俯瞰すると、その努力が後世に引き継がれ、また確実に伝えられていくのであろうか。米作りの技術は過去着実に進歩・普及してきたが、生産現場でそれが活かされてきたのは、「自然を読み、稲と語る」先人たちの知恵と指導力があったからにほかならない。東北の農業と文化的な発展は、これら先人たちの鍬が大地を耕し、人々を培ってきたことによる。

そこで、先人の知恵を継承する東北の代表的な先輩を囲み、自然を読み、稲と語り、そして心を耕す術を学び、気象変動下の今日の稲作・農業のこれからを考える。

内 容

進 行 中山 正義（東北農業試験場）

【開会挨拶】 井上 隆弘（東北農業試験場長） 9:30～9:50

【対 談】 原田 津（総合司会：農文協常務理事）
一先人の知恵“寒だめし”の読み方、農事への活かし方 9:50～10:50

●白鳥 文雄（宮城県一迫町菊栽培農家、寒だめし民間気象予報家）

○徳永 光俊（大阪経済大学日本経済史研究所長）

一山・水・田の神の宿る“たろし滝”が語る長年の自然、氷柱、稲の読み方一 10:50～11:50

●板垣 寛（岩手県石鳥谷町稲作農家、たろし滝測定保存会長）

○古澤 典夫（元岩手県立農業試験場長）

昼 食

一自然を読み、稲と語り、冷害を防ぐ技術のすべて一 13:00～14:00

●小林 福蔵（青森県六戸町稲作農家、平成5年冷害時に被害を回避した篤農家）

○金澤 俊光（元青森県農業試験場長）

一情報技術革新の進む今日、次世代を担う農家の生き方一 14:00～15:00

●水稻冷害早期警戒システムモニター・仙台管区气象台

○鳥越 洋一（東北農業試験場）

休 憩

【総合討論】 原田 津・鳥越 洋一（司会） 15:10～16:30
西尾 敏彦（コメンテーター：農林水産技術情報協会顧問）

【閉会挨拶】 亀若 誠（農林水産技術情報協会理事長） 16:30～16:45

先人の知恵“寒だめし”の読み方、農事への活かし方

● 白鳥 文雄さん

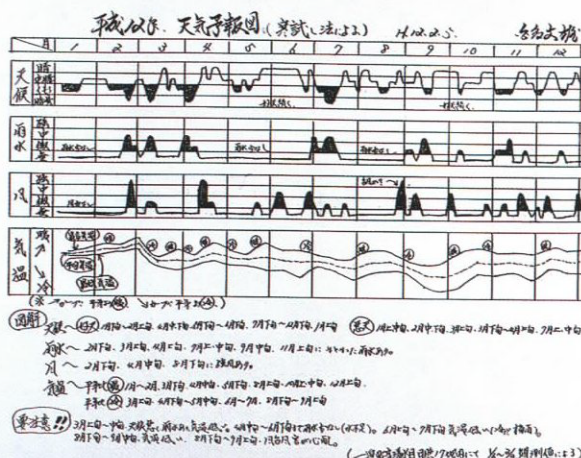


【出会い】昭和55年から3年続きの冷害を経験し、何とかして「年間の天候を予測できないか？」と思っていたところ、昭和62年に桜川豊吉氏（故人）の“寒だめし”にめぐり合い今日に至る。

【手法】通称「寒の内」といわれる小寒～立春まで30日間の天候を観測し、これをその後の1年間に当てるという、今どき非科学的と一笑されそうな手法ですが、大まかな傾向としては、当たる確率が高く、身近な人たちにも喜ばれている。

【活かし方】米：減数分裂期のずらし、水・肥料の加減など。菊：花芽分化期のずらし、水・肥料の加減、温度の調節など。

【“寒だめし”を通して】先人たちは、動植物と同じように、研ぎ澄まされた予知能力を身につけていて、天候のみならず『宇宙のいのち』とも共振していたのではと、近年思うようになった。



● 徳永 光俊さん



昭和27年生まれ。京都大学農学部農林経済学科卒。現在大阪経済大学日本経済史研究所長。農学博士。主な編著書、『日本農書全集』第Ⅱ期、『日本農法の水脈』（農文協）、『20世紀の経済と文化』、年版『経済史文献解題』（思文閣出版）。

数年前、白鳥さんとお会いした時の衝撃は忘れられない。どぶろくではない。寒だめしの天候予測だ。その後の東北・北陸行脚の幕開けだ。「農藝」の名人たちを訪ね歩きながら、私の修行は続く。

● 板垣 寛さん



— “たろし滝”が語る豊凶占い—

毎年2月頃になれば、石鳥谷町西部の奥羽山脈の中腹に“たろし滝”が出現する。古来800年も昔から、厳しい自然環境に生活してきた私どもの先輩たちは、その“たろし滝”の氷柱の太さによって稲作の豊凶を占ってきたと伝えられている。この興味深い話を私が聞いたのが昭和49年の秋のこと。以来26回にわたって、実際にその太さを測定・記録している。全くの自然の摂理の具現像と作況との関係などを検証しながら、次世代の米作りの指針の一助になればと思っている。

たろし滝の太さと作況

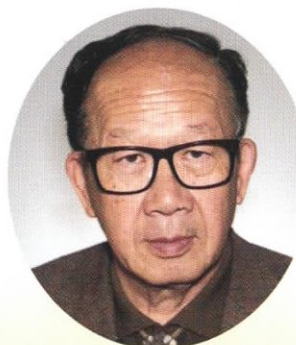
年次	太さ	作況指数		年次	太さ	作況指数	
		岩手県	北上川下流			岩手県	北上川下流
昭和50年	4.2m	109	110	昭和63年	5.0m	85	87
51年	3.5m	82	88	平成元年	計測不能	100	99
52年	6.5m	103	103	2年	5.0m	106	105
53年	8.0m	112	111	3年	計測不能	90	92
54年	計測不能	105	106	4年	計測不能	100	99
55年	3.5m	60	72	5年	計測不能	30	34
56年	6.0m	76	76	6年	4.4m	110	110
57年	計測不能	89	89	7年	4.7m	96	95
58年	4.8m	99	99	8年	計測不能	102	103
59年	7.0m	109	108	9年	3.9m	105	105
60年	7.8m	109	109	10年	6.3m	96	96
61年	6.4m	107	109	11年	4.0m	105	104
62年	計測不能	107	108	12年	計測不能		

測定日 2月14日 午前10時。
平成12年より 2月11日 午前10時。

計測後の会長川柳

平成3年 温暖化たろしの太り妨げる
平成4年 減反がこわくてたろしふとれない
平成5年 たろし滝無いので知恵でカバーする
平成6年 凶作の心配ないと云うたろし
平成7年 並作はかたいとたろし笑っている
平成8年 並作に夢を託せと云うたろし
平成9年 油断無く並の太さがそっと云い
平成10年 さあ大変減反増えるこの太さ
平成11年 まずまずの太さで秋に夢を馳せ
平成12年 米あまり心配してか姿消し

● 古澤 典夫さん



昭和3年盛岡市生まれ。昭和24年盛岡農専卒業後、岩手県立農業試験場で畑作・農業経営の試験研究に従事。また県農政部畑作園芸課長、農業短大副学長、農業試験場長を歴任。退官後は岩手経済連技術参与、岩手大学農学部非常勤講師を務める。畑作とくに雑穀関係の監修・編著・共著が数冊、他に『岩手の食事（代表）』、古農書『軽邑耕作鈔』など。昭和63年農業技術功労賞受賞。

農作物と豊凶と俚諺などに関心が深かったもので、たろし滝と私の予測との二説が新聞報道されたことがあり、板垣さんから意見を求められている。板垣さんが会長の「稲の会」で講演したこともある。

自然を読み、稲と語り、冷害を防ぐ技術のすべて

● 小林 福蔵さん



一恩師、友人、自然から学び、社会に恩返し一

米作り半世紀以上。科学技術の進歩した時代に襲った大飢饉。気象の恐ろしさを体験した。幸い恩師、友人、そして大自然から学んだこと、貧しい家庭で育った苦しさが心の土台となり、すべて自分を支えてくれた。その慶びを社会に恩返しができた。いまだに未完成だが「農は心を耕す」を座右の銘として、人生の残りを頑張りたい。

寒 立 馬

厳寒のなかで、尻屋崎の冬は
 厳しい、うねりをあげて風が巻いている
 身を刺す寒だ、わずかな枯草を
 足で踏み、飢えしのんでいる、馬休には
 ツラウがぶら下り、草を運ぶ求めて
 生きている。私にとって生命力の強さに
 感動する光景、それが私の心に見えた
 尻屋崎の寒立馬と子を産むという
 強い子が生まれることの試練を思い
 浮かべ、強い家族の絆、今の自分
 である。

昭和40年代 下北半島を旅する
 正月

大自然からの教訓

八甲田山系のブナ林

高冷地は冬場積雪量が多く
 春がおそく、夏が短い、秋が早い
 短い夏は死に、枝葉をいつより
 広げ、秋の終りには落葉した枯葉
 の蓄積、それが腐葉となり、エネギー
 の供給源、土壌中に根を横に
 根を伸ばし、多くの根を出し
 岩をもかんで、雄大に生息している
 たいさく勇姿、我が感動する

ヤマブキに対する原点を学ぶ

(雨)

40年代の頃

● 金沢 俊光さん



昭和10年生まれ。昭和33年青森県職員となる。農業試験場に配属され、水稻の栽培・育種に関する試験研究に従事。昭和61年藤坂支場長、平成4年農業試験場長を経て、平成8年3月に定年退職。この間、農林行政（3年）、農業教育（4年）にも従事。現在はJ A 青森経済連米穀部技術主管。

小林氏が昭和33年に青森農試より水稻の現地試験を委託され、その後の活動過程で懇意となる。特に、昭和55・56年の大冷害で小林氏の実力が高く評価され、現地指導の拠点となり接触の密度を増す。

情報技術革新の進む今日、次世代を担う農家の生き方

● 小松 庸一さん

(早期警戒システムモニター、宮城県岩出山町の専業農家)



いままでの農家の農業に関する情報源は、地域の古老、篤農家、地域農業改良普及センターや農協などが担ってきた。現在は農業試験場、大学、気象庁、農業関係団体のインターネットによる連携により、各地域の作物試験や品種改良情報、天候の変化、農産物の市場価格などもリアルタイムで情報が飛び交っている。これからの農家と専門知識を持つ方などの研究機関とが直接対話できる環境が整ってきている。農家もこれまでの経験と地域の環境を分析することができないと有用な情報も生かすことができない。有用な情報を選択し、自分の貴重な経験と照らし合わせて判断できることが農業経営の充実にもつながる。

● 太田 俊治さん

(早期警戒システムモニター、宮城県石巻市の兼業農家)



農業経営はますます専門化が進み、多くのものを作り育ててきた時代から単一品種を大規模に作付けするようになりました。また一方では作付面積の小規模化のため兼業化が進んでいます。我が家の経営は水稻面積が小規模なため後者の経営を選択しました。米を商品としてとらえ付加価値をつけ独自ブランドを確立するため、品種の改良育成に取り組んでいます。インターネットを通して多くの貴重な情報が入手できるのが魅力です。壮大な挑戦ですが、先人が当時の冷害を克服し農家経済を回復させるために取り組んだ労苦にふれ、これから20回くらい収穫できるであろう稲を栽培するとき、その中にときめきと楽しみを秘めたものが潜んでいるような気がします。

● 竹谷 良一さん

(仙台管区気象台天気相談所長)



仙台や盛岡にみる東北地方の気候変動の実態：IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の報告によれば、二酸化炭素の放出等人間活動を起源とする地球温暖化がすでに始まっているといわれています。また、最新の予想を基に、21世紀後半に二酸化炭素の放出量が現在の2倍になると仮定すれば、地球の平均気温が現在より1℃～2℃上昇するといわれています。ここでは、東北地方或いは一都市の数十年後の気温を予想することはできませんが、これまでの観測事実を紹介することによって、東北地方の気候変動の傾向を理解して、今後の温暖化に対処する際の参考になれば幸いです。

農の心を引き出す方々

総合司会

● 原田 津さん



(農文協常務理事)

昭和7年東京生まれ。学童疎開で半年間、長野県松本市で暮らす。昭和32年早稲田大学文学部（社会学）卒。以後、日本の農山村を巡礼し農家を訪ね歩く。平成元年より現職。著書に『都市よ驕るな』（サイマル出版会）、『日本の農家』（三一書房）、『死ぬときだけの方言』（日本経済評論社）、『むらの原理 都市の原理』『食の原理 農の原理』（農文協）ほか。

総合司会

● 鳥越 洋一さん



(東北農試総合研究第4チーム長)

昭和25年岡山県生まれ。昭和59年京都大学農学部作物学研究室助手から農水省農業研究センターへ。平成5年東北農業試験場に異動、同年の大冷害を身をもって体験する。平成6年から水稻冷害早期警戒システムの開発研究にとりかかり、平成8年より現職。同システムのホームページを平成8年から開設・運営し、編集長を務める。

コメンター

● 西尾 敏彦さん



(農林水産技術情報協会顧問)

昭和6年長野県生まれ。昭和30年東京大学農学部卒業。昭和31年農林省四国農業試験場、以後水稻栽培などの研究に従事。平成2年農林水産技術会議事務局長を最後に農水省を退職。生物系特定産業技術研究推進機構理事、農林水産技術情報協会理事長を経て現在日本特産農産物協会理事長。著書に『イソップ風農業研究ものがたり』『農業科学技術物語』『バイオテクノロジーの農業哲学』『農業技術を創った人たち』など。



老夫婦がクイガケを行っている
・ ・ 収穫の喜びを感じながら、人生をともに歩む

■ 表紙説明：

本シンポジウムのテーマである「稲と、稲と語る人」のデザインを中心におき、上の方には自然（気象）をイメージした太陽と雲のデザインを配置しています。これらのデザインが、米粒をイメージしたデザインと一筆書きで一つになることで、自然を読み、稲と語り、そして心を耕すことにより絶え間なく生産を行ってきた農の営みの一体化を表現しています。（デザイン作成：東北農試・米丸淳一）

発行：農林水産省東北農業試験場（場長 井上隆弘）

編集：2000年東北農業試験場公開シンポジウム事務局（鳥越洋一）

住所：〒020-0198 岩手県盛岡市下厨川赤平4

印刷：河北印刷株式会社